

# 山里の古い住宅からのメッセージ



建材や設備機器の進歩は、私たちの住まいに、快適さや便利さをもたらした。しかし、私たちは今、自然の息吹に触れる機会や、額に汗する感覚も、失いたくないと思いつつ始めている。住まいというクリエイティブな行為には、様々な可能性や方法がある。そんなことを、関西の建築家、平井憲一さんの手がけたある家が、そのたすまいを通して教えてくれている。(企画・制作/読売新聞大阪本社広告局)

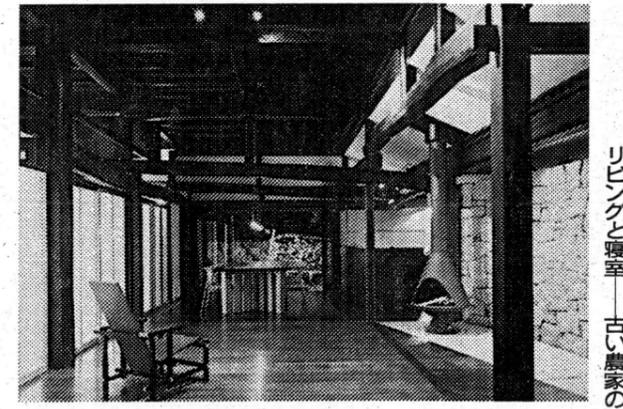


棟原の農家 山里で連続と生き続けて来た力強さがある

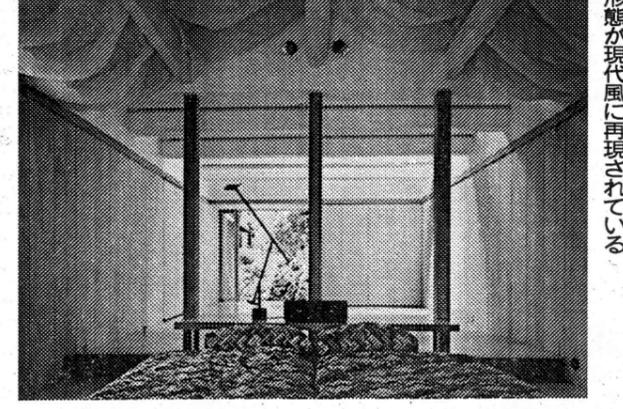


平井憲一(ひらいけんいち)氏 一九五二年大阪生まれ。七九年アトリエ・サム」一級建築士事務所を開設。八八年に平井憲一建築事務所を改名。八五年商環境デザイン賞入選、八六年同賞およびナン・ヨッパ賞、八八年には商環境デザイン賞に二作品入選。代表作に民家を蘇生させた「中浜の家」があり、現在、奈良・学園前で本格的な数寄屋建築に挑戦中。民家の改造、医院、ビル、マンションなどのプロジェクトも進行中。

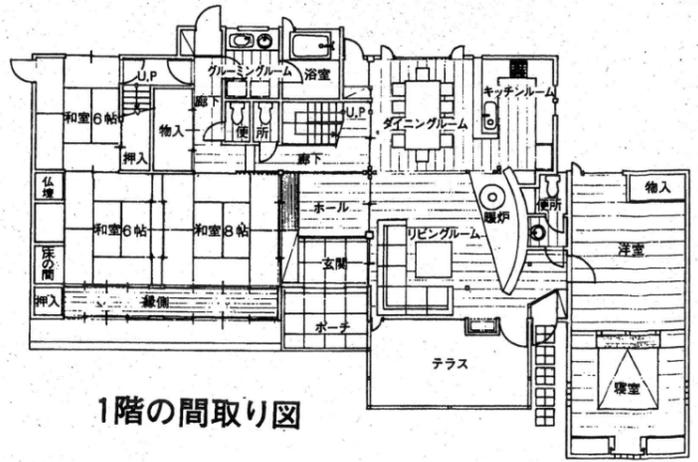
## 眺 め の い い 部 屋 と は



リビングと寢室 古い農家の形態が現代風に再現されている



### 太陽や雲を友のように



1階の間取り図

『眺めのいい部屋』という映画があった。二十世紀初頭の、ある良家の令嬢が、年上の従姉妹に付き添われて、古都フィレンツェのホテル・ペルリに滞在することになった。彼女は眺めのいい部屋、緑や光、風。自然の中。窓から眺める感動が、窓を開けてガツカリしてしまう、というシーンから映画は始まる。私たちは、旅をしたり、知人の住まいを訪れたりしに付き添われて、古都フィレンツェのホテル・ペルリに滞在することになった。彼女は眺めのいい部屋、緑や光、風。自然の中。

で見える風景は素晴らしい。だが、ホテルに限らず一般の家でも、窓からの眺めは、外で見る風景とは異なった風情を感じさせる。美しい風景は、あたかも一枚の絵を見ていような錯覚を私たちに与えてくれる。また、枠の中に切り取られた自然が、四季のうつろいに呼応して一瞬の輝きを放つ時など、静止した絵画とは異なった感動を受けるものだ。

建築と環境の関係 しかし、私たちが接する一般に環境が良いと言われている郊外の住宅で、そのような風景を窓から眺めることができたのだろうか。確かに、家々のまわりには木々が植えられ、街路樹が緑豊かな環境を演出している。だがそこには、合理性と生産性が追求された、画一的な住宅が立ち並んでいる。窓を開ければ隣家の窓が向かいにあって、一枚の絵どまりか、プライバシーを守ることができない。

このような住環境を憂えていた時、ある民家の改造にかかわることになった。そしてその仕事を通して、人間生活のための建築と環境の関係をじっくり考えさせられた。場所は、奈良県宇陀郡樺原町。西名阪国道の針イントーを降りて、県道をしばらく車で走る。春には桃の花が咲く小道を右折し、曲がりくねり、緑に囲まれた山道を十分ほど登ると、時代の流れとは無縁のような十六軒の集落が姿を現す。さらに、そのT字路を左に進むと、竹やぶを越えた時に、一軒家が建っているのが見える。

写真・松村芳治氏

文・平井憲一氏